

第1回岸和田市立幼稚園閉園基準等検討審議会にていただいた主な意見

● 公立園のあり方に関するご意見

- 支援が必要な児童・園児は一定数いるため、市立園では、支援を必要とする子どもを一定受け入れるという役割があるものと思っている。市立の施設が閉園する場合、民間の施設で支援が必要な子どもを受け入れる環境が整っているのか、小学校入学までに必要な経験を得られるのか懸念する。
- 外国籍の子どもの受入れについても、支援が必要な子どもの受入れについても、市立園がどれだけの役割を果たすべきなのか、考えていく必要がある。
- 支援が必要な児童等の受入れに関しては、従事される教職員、保育士の専門性にも関連してくるものと考えられるので、その専門的な知見を伸ばす仕組みを考えしていくことも必要。
- 市立幼稚園では、幼稚園教育について絶えず研究を重ねている。その研究発表を民間園の先生や就学前教育に関わる方々に見ていただいている。就学前教育を中心に研究していくことも市立園の果たす役割であると思う。
- 市立園が減少すると、自宅からの通園距離が遠くなり通えなくなることも考えられる。通園環境を整えることについても考えてもらいたい。

● 集団規模に関するご意見

- 例えば5人だけの学級より、10人、15人の園児たちが、いろいろな遊びを通じながら、発達していくことが理想的であることは理解している。園児が1人2人になってきたら、小学校に行くまでの教育が成り立たなくなるものとも思う。
- 人数が少ないとクラス替えがないが、人数が多いとクラス替えによって多様な人間関係の構築や経験ができる。一定の集団規模が確保できているからこそできる経験である。人数が少なく複数クラスが形成できないとなると、そういう経験ができるのか不安に思う。
- 人数が多いと同年代に様々な子どもがいるので、周りの子ども達を見ながら学んで育つ良さがある。例えば、運動会での隊形移動の際にこの場所はどう変わっていくのか等、考える機会も得られ、非認知能力の向上につながる。
- 20人、30人の学級で、みんなで育むことも1つ大事な視点であると思う一方、もしも集団に馴染めない子どもがいたときに、多人数の学級だけがいいのか、その受け皿となる機能についても議論がいるのではと思う。

- 少人数の市立幼稚園では、地域、小学校、近隣の幼稚園等との交流を実施しており、できるだけ多人数の中での経験が得られるよう工夫がされている。一方、近隣園と交流する際の移動にあたり園児に負担が生じている現状もある。
- 少人数であれば、園児が先生に自分の思いを伝えやすかったり、先生が子ども達それぞれの課題や得意分野を見出すことが早い場合がある。
- 小規模であると、先生方の一番大変なところは保育内容である。制作物の作成等に苦労されており、3人、4人の園児の保育を工夫しながら実施されている。
- 支援が必要な園児が多い多人数の園では、担任が学級運営や介助員への伝達等について苦労する場合がある。

● 基準に関するご意見

- 他市の事例では人数で区切っているところがあるが、岸和田市は縦長の地形で通園範囲も広範にわたるので、単に人数だけで判断することが妥当かどうか。

● その他のご意見

- 民間が認定こども園を整備する場合、市が整備する場合と比べ国・府から補助金を得られる仕組みがある。
- 市立の幼稚園・保育所が多いことは、良いことである一方で、運営面での課題に直面している。公営から民間へ役割が移っていく局面にあって、民間園への支援の仕組みを構築する必要がある。
- 保育業界全体で保育者のなり手不足に直面している。知識・経験のある先生を採用し、保育に従事してもらうためには、園の規模感や園数や先生を育てる仕組みについて議論が必要。